〔２８〕フィリピの信徒への手紙３章 17－19 節（Ⅱ）
「腹を神としてはならない」

《1》

前回は、ただ今お読みしたうちの前半 17 節を共に神さまの、御言葉として聞きました。

今朝は 18 節、19 節です。――ここで言われていることは、キリストの十字架がすべてのことの中心である、ということです。このように、標語的に言いますと、ほとんど誰でも自分も同じ思いだ、と答えられるでしょう。しかし、本当にそうでしょうか。

十字架の代わりが効かないのは言うまでもありません。十字架に並んで何かが必要だ、ということでもない。私たちの救いに関しては、十字架以外、何もなく、十字架と共に必要なものもなく、ただ十字架がすべてです。

先日、この南浦和教会を会場として、県南牧師会という有志で、任意の集まりがありました。川口、戸田、蕨の各市内にあるいろいろな教会の牧師が（改革派とか、福音自由とかにこだわりなく、あらゆる教派の教会の牧師が）参加します。当日 11 名の参加でした。

そして、新しくできた会堂を皆さん、見て回り、素晴らしいといったお褒めの言葉もいただきましたが、ある牧師が、呟くようにこういいました。「ああ、十字架があるんですね」。

もちろん、そう言われる御自身の教会堂にも十字架は、きちんとあるのではないかと思います。しかし、改革派の古い（と言ってよいでしょう）一部には十字架は偶像礼拝だと言って、これを会堂内に置き、掲げることを禁じる人たちがいました。

その人は、きっとその頃のことを知っているので、そう言ったのだと思います。確かに、歴史を振り返ればヨーロッパ中世のカトリック教会においては（今も、ほとんどそうかと思いますが）教会の中には、マリア像をはじめ、諸聖人の像が置かれています。また、十字架においても、そこには人となられて十字架にかかられた主イエス・キリストが描かれ、刻まれていました。

これは信仰の道を踏み外していると、宗教改革の中でプロテスタント教会へと転じた教会からはいち早く持ち出され、処分されています。

そういった諸聖人などの像と十字架とを一緒に考えるのは、間違いでしょう。聖人にせよ、マリアにせよ、私たちはそもそもそういったものを認めていません。人としてのイエス・キリストを現すというのは、これは偶像礼拝とならざるをえないでしょう。

しかし、十字架は違います。十字架に救いのすべてがかかっています。ということは、私たちの命、希望、正義、喜び、忍耐…、といったことのすべてがかかっている、ということです。

コロサイの信徒への手紙１章 19、20 節をお読みします。「神は御心のままに、満ち溢れるものを余すところなく御子の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち

立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。
御子による平和への和解。それは万物に及ぶものですが、今の私たちは、自分自身に与えられていることとして、感謝をもって受けとめましょう。

ところで、これほど貴い神さまの御業が、一般的にはどう捉えられているのか。御言葉自身が語っています。
コリントの信徒への手紙一 1 章 22～25 節「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、私たちは十字架に付けられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」。
漠然と十字架を見るなら、それはつまずきであり、愚かなものにしか見えない。なぜ、あのような十字架が救いをもたらすことができるのか。しかし、それは人間的な知恵の限界でしょう。
知恵や力で、神さまが人間を凌駕していることは改めて言うまでもありません。人間は、それをつまずきや愚かさとして見ることしかできないのです。
十字架による神さまの力・知恵が語られているコロサイの信徒への手紙 2 章 13 節後半から 14 節をお読みします。
「神は私たちの一切の罪を赦し、規則によって私たちを訴えて、不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました」。
それで、もう私たちは、証書をもって私たちを追い回し、返済をしつこくせがむ悪魔からは自由にされています。

《2》

今朝の御心に留めたい御言葉の始まりは、18 節「何度も言ってきたし、今また、涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです」との御言葉でした。
パウロはいわば強い人間で、強情と言ってもよいほどの雰囲気を漂わすような人ですが、ここでは、涙ながらに言います、と述べています。
それで、そのことだけでも少し注目されます。決して、お涙頂戴で、同情を買って、共感を得ようというのではありません。そのようなことはいわばパウロの流儀に反しています。
そういうことではなく、事の本質から言って、十字架に敵対して歩む者たちが最後にはどうなるのか。このことがよくわかっているので、涙を禁じえないのです。
涙を禁じえないまでの思いは、例えばローマの信徒への手紙 9 章 3 節で、こう言われています。
「私自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神

から見棄てられたものとなってもよいとさえ思っています」。
　また、ペトロの手紙二3章9節「ある人たちは遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで、皆が悔い改めるようにと、あなたがたのため忍耐しておられるのです」。
　悔い改めるように、ということです。生き方を全く方向転換し、改めて、神さに立ち帰るように、というのです。これはペトロのみならず、パウロも考えは全く同じでしょう。
　しかし、悔い改めないならば、今朝のフィリピの19節にあります。「彼らの行き着くところは滅びです」。
　十字架を離れて、救いはない。私たちを愛してくださり、御自身、私たちの身代わりとして罪のために死んでくださった主イエス・キリストです。そして十字架を通して、また十字架と堅く結びついたご復活により、真実の命に私たちを生かしてくださる主イエス・キリストの愛と御業を離れては、救いはどこにもありえません。

　そして、十字架に敵対して歩んでいる者が多い。
　では、どのような人たちでしょうか。まず、これは、信仰が初めから無い人についてではありません。なぜなら、パウロの手紙の性質上、基本的にことごとく、それは信仰者の生き方について記されているからです。
　また、そもそも信仰がないならば、十字架が何かということも、よくわかっていないでしょう。あなたは十字架に敵対して歩んでいると、仮に言われたとしても、訳がわからず、白けてしまうだけでしょうね。
　また、パウロは涙ながらにと言ってしますが、それほど感情移入できるような特に親しい交わりが敵対者との間には、かつて、あったものとも考えられます。
　このようなことから、ここで言われている十字架の敵というのは、少なくともかつては信仰者であった人、さらに、今でも自分は真っ当な信仰者であると思っているような人（本当に違うが）たちです。
　そこには、大きく二つの集団が考えられそうです。

≪3≫

　一つには、いわゆるユダヤ主義的な人たちです。律法を大切にして、主イエス・キリストへの信仰が与えられてからも、後生大事に律法を実践しようとし、忠実に従おうとしているような人たちです。
　もう一つには、異邦人が多いでしょうが、信仰と生活とは別物と割り切って、勝手自由に振る舞っているような人たちでしょう。
　ここで、そのような彼らの姿が、こう描かれています。
　「彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません」。
　腹を神とする。ユダヤ主義者たちからすれば、食物に関する律法のいろいろな規定があるわけですが、そういったことを守るほうが、大切だと考えた。
　それだけで救いが実現されると考えたのか、十字架のほかに食物規定が必要だと考

えたのか、詳しくはわかりませんが、とにかく十字架の知恵と力を軽く見て、律法を守るという人間的な力に重きを置いています。
　また、異邦人にとって、腹というのは、ここでは、度を超えた邪悪な欲望、と言ってよいでしょう。
　もちろん、腹が人間に備えられていて、基本的に何でもおいしく食べることができるとうのは、神さまの恵みですね。一般恩恵です。私は今度のことで、このことを本当に強く思い、感じました。
　生意気にも、食べ物をおいしく食べられるのは当然ではないか、と思っていました。ですから食前の感謝をするときにも、食べ物が与えられことを感謝しても、これが美味しく食べられることを感謝したりはしませんでした。
　しかし、違うんですね。今、何を食べても味がしない、あるいはまずい。やはりこの感謝はできないんですね。
　味覚が正常に復する時が、いつか来るのかなあ、と不安になったりもしますが、とにかくこれらは、私の不信仰のせいかなと思っています。
　横道に逸れたかもしれませんが、とにかく、腹が与えられているのは感謝なことです。しかし、もしこれを間違ったように用いるなら、それは罪を引き出すだけのことに終わってしまいます。
　あれもこれも、自分の欲しいものを手に入れる。自分のしたいことで、別に社会や他人に何の良い影響を与えることもないようなことに没頭する。
　そんな生き方は、もし、十字架の意味と重要性が分かっているならば、そして今、その十字架の恵みに生かされているならば、ありえないことではないか。パウロは無言のうちにもそう訴えているでしょう。
　また、彼らは恥ずべきものを、誇りとしている。
　この恥ずべきものとは、割礼のことではないか、と言われもしますが、何も断定的なとは言えません。
　また、異邦人にとっても、恥ずべきことが何であるかは、殊更に言及する必要はないでしょう。
　私たちは、恥ずべきものを誇るのではなく、ガラテヤの信徒の手紙 6 章 14 節「しかしこの私には、私たちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません」。

　そして、そのように十字架に敵対して歩む者について、最後にこう言われています。
　「(彼らは) この世のことしか考えていません」。
　「この世」も、それ自体悪いものだとは言えません。しかし、用い方によって神さまのご栄光を現せなくなり、滅びをもたらす一因となってしまいかねない。
　イエスさま言われています。「あなたがたは神と富とに仕えることはできない」。
　富がここで、「この世のこと」にあたります。私たちは、今、現実的にこの世にあって生きているのですから、この世のことを考えないわけにはいきません。だからと言って、この世・富に仕えることはできません。それは、十字架に敵対することになり

ます。
　ですから、信仰に生きる私たちは、決して十字架を離れず、堅く主の十字架とその恵みに留まりましょう。
　また、現在、信仰をお持ちでなく、また求道をされている方々が、十字架を離れたフェイクの教えに捕らえられることなく、正しい、正統的な信仰（それは一言で、十字架の信仰）によって、まっとうな救いを得られることを、得られることを切に願っています。
　私たち皆、そのことを覚え、祈り、語り続けていきましょう。
　最後に、今日の個所と同じく腹を神としていることについて、それを批判するパウロの言葉で、終わりにします。
　ローマの信徒への手紙 16 章 17、18 節「兄弟たち、あなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに反して、不和やつまずきをもたらす人々を警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。こういう人々は、私たちの主であるキリストに仕えないで、自分の腹に仕えている。そして、うまい言葉やへつらいの言葉によって純朴な人々の心を欺いているのです」。お祈りします。

2022 年 5 月 22 日　朝拝

　恵みと憐れみに富みたもう天の父なる神さま、御名を崇めます。
　皆一緒に、私に倣う者となりなさい、とパウロはフィリピの教会に強く勧めています。
　それは、キリストを見上げ、ただ主に従ってひたすらに、前に向かって全身を傾けて、歩み続けることです。すべての信仰者の目標地点を目指して、なりふり構わぬほどの熱心と集中力で、邁進していくことです。
　しかし、同じ信仰にかつては、あるいは今も立ちながらも、パウロと思いと行動を共にできない多くの人たちがいます。
　当時と状況が変わった今も、同じように、十字架に敵対して歩んでいる人たちがいます。
　どうか、今、離れてしまったお一人お一人が、十字架を中心であり、すべてとする、正しい信仰に立ち戻ることができますように。
　また私たちも絶えず、堅く十字架につながり、悔い改めをもって、主イエス・キリストの愛と恵みのうちに生かされていることを、感謝し、喜ぶ者とさせてください。
　御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司